

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	坂元 正樹
論文題目	オーディナリ型自転車の時代		
(論文内容の要旨)			
本博士学位申請論文は、自転車の技術上・形態上の発展段階の一つを、「オーディナリ型自転車の時代」として認識し、この形式の自転車が開発され、いちはやく普及した英国において、それが前後の時代と比較してどのような特徴をもったかを分析した論文である。論文は全7章によって構成される。 第1章「19世紀イギリス自転車史概論」では、玩具に過ぎなかった自転車が、1860年代初にフランスでミショーによって実用的なものとして改良されて以降、英国で1869年に前後輪の直径が極端に異なるオーディナリ型自転車が開発され、さらに1890年代には、現在の自転車の性能・形態に近いセーフティ型が出現し、それが広い階層に普及するにいたるという推移があったことを述べ、オーディナリ型が一般的であった1870年代初めから90年代半ばまでを、一つの時代としてとらえることを提唱する。この時代を特徴づけるのは、自転車をめぐる出版物の出現と、自転車愛好者のクラブの組織であるとする。 第2章「自転車趣味の展開」は、そのクラブのもった意味について論じる。オーディナリ型自転車は、前輪を極端に大きくすることによってスピードを獲得したが、同時に操作が困難になった。クラブは、練習や走行を共に行うことでこの問題の解決をはかり、また自転車の社会的認知や道路改善の必要を一般に働きかけた。しかしそれ以上に重要であるのは、この時代の他のスポーツ・クラブと同様に、クラブが会員相互の親睦や交流を図る社交の機会として機能していたことである。自転車クラブが採用した行動様式や用語は、狐狩りなどの狩猟会のそれを模倣したものであり、狩猟のもつ社交的性格と社会的prestigeとを受け継いだ、代替的な活動であったことが指摘される。 第3章「19世紀イギリスにおける自転車レース」では、自転車におけるプロフェッショナルの出現が論じられる。自転車の速度の競争は、まず地点間の走行に要した時間を競うことから始まる。初期のガイドブックにおいては、ルートの案内とともにタイムの記録が大きなスペースを占めていた。複数の競技者が同時に走行するレースが開催されるようになると、ルールの制定や調停のための管理・監督の団体が必要となり、自転車連盟（BU）が組織される。BUは、競技におけるプロフェッショナルの資格を定義し、プロがアマチュアと同じ競技に参加することを規制して、軋轢も生む。これらは他のスポーツ競技が共通して経験したことであり、近代スポーツの制度確立の時期に、自転車もまたその動きの中にあったことを示す。英国以外においてもレースはさかんになったが、それらがロードレース中心であったのに、英国ではトラックを周回する形式に限られた。その理由として、すでに興行として同じ形式の徒歩競走が実施されていたことに加えて、路上走行を危険視する傾向がいまだ強かったことや、他の国の場合のように新聞が販売促進のためにレースを主催・後援するのに積極的ではなかったことが指摘される。 第4章「オーディナリ型自転車の形態変化と車種分化」は、技術史の面からオーディナリ型自転車の時代の特徴を分析している。ここでとりあげられている技術上・デザイン上の的变化は、前後輪比の変化、板ばねからコイル状のばねへの移行、踏み幅の変化、フロントフォークの角度の変化、ハンドルの長さや形状の変化などである。 前後輪の直径比は大きくなる傾向にあったが、そのことは競技用のレーサー・タイプにおいて著しく、路上走行を目的としたロードスターでは変化は少なかったことを指摘			

異なった車種の分化と共存について論じる。さらに、この時期の技術上の変化は、全体として安全性、快適性、操作性を犠牲にして速度を獲得することに目的があったとする。これは比較的少数の人が遊戯的に利用し、特権を誇示しようとしたこの時期の自転車の社会的用途に適合した変化であったといえることができる。

第5章「自転車旅行と出版物」は、この時期多く現れた自転車関連の出版物のうち、特に旅行用のロードブックおよび旅行記を扱う。ロードブックは前世紀より刊行されていた馬車旅行用のロードブックの形式を踏襲したが、道路の分岐や土地の高低についてより正確になっている。オーディナリ型自転車の最盛期はまた、さまざまな手段で世界旅行がこころみられた、いわゆるグローブ Trotter の時代と一致する。自転車はその手段としても使用され、旅行の記録が公表された。自転車は動力を用いず、また運転者がいかなるかたちでも外界から保護されておらず、しかも機動的であるという点で、徒手空拳であえて危難に立ちむかう冒険と探検の精神に適合した交通手段であったといえることができる。こうした冒険者の足跡は、極東のわが国にまで及んでいた。

第6章「三輪車の発展、合理的娯楽と自転車」は、これまで自転車の歴史の中でほとんど触れられることのなかった三輪自転車について考察している。まず、当時の販売カタログなどから、オーディナリ型自転車と同時並行的に多くの三輪自転車が開発され、市場において販売されていたこと、相当のユーザーが存在したことを明らかにする。三輪自転車は、三つの車輪の位置関係および大小の関係の組みあわせで多様であったが、オーディナリ型の二輪車と比較してより安全で操作が容易であったことは共通している。同時に複数が乗車することのできる型もあり、自転車のもつ遊戯性や社交性を備えつつ、オーディナリ型自転車の扱いにくさと危険とを免れており、両者は相補的な関係にあったといえる。安全で健康的な三輪車は合理化された遊戯として、オーディナリ型へ抵抗のあった人びとにも許容され、また女王が自身のために発注したこともあって、よりレスpekタブルな娯楽として受容された。

第7章「自動車の時代へ」は、英国で自ら開発した自動車の宣伝を行いセンセーションを呼んだE・J・ペニントンの「事件」の意味を論じる。英国では1860年代に自動車の路上走行を規制する赤旗法が施行されたために、それが阻害要因となって、内燃機関の時代になっても自動車の開発、導入が遅れた。90年代に赤旗法が廃止され新たな自動車の開発が必要とされた時に提示され、さまざまなデモンストレーションを通じて宣伝されて多くの投資家をひきつけたのがペニントンの発明であった。現在ではこの発明には実体がなく、詐欺的行為であったとされているが、申請者はこの「発明」が多くの人の関心を集めた理由として、それが三輪自転車にエンジンを搭載した形式で、また同乗者の着席位置も三輪自転車の方式を採用していたことを指摘する。すなわち、オーディナリ型自転車の時代の、自転車利用に関する特異な状況が、イギリスにおける自動車の未来についても特異なものとしたことを結論としている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文『オーディナリ型自転車の時代』は、自転車の技術上・形態上の発展段階の一つを「オーディナリ型自転車の時代」として設定し、この形式の自転車が開発され、いち早く普及した英国において、その時代が前後の時代と比較して、どのような特色を有したかを分析した論文である。

自転車は、より玩具に近いものとしての起源をもつが、社会的有用性をもった用具として工業的に生産されるようになったのは、1860年代初期のフランスのミショーによる改良以降のことであった。60年代末には、前後輪の径の大小を極端にして走行性を高めたオーディナリ型自転車がイギリスで開発される。オーディナリ型自転車はまさに標準的なものとして普及するが、80年代後半には現行の形式に近いセーフティ型自転車が出現した。より安全で快適性にすぐれたセーフティ型はユーザーの数を一挙に増やし、自転車は現代社会における基本的な生活用具として定着する。またこの発展の過程で自転車には、ペダルおよびクランクの使用、中空金属パイプ素材の採用、チェーンの装備、ベアリングの導入、空気入りゴムタイヤの使用など、多くの技術的改良がほどこされた。

旧来の自転車の歴史に関する認識は、自転車という実用具が、走行性、安全性、操作性、快適性、経済性のすべてを向上させる目的で、徐々にかつ漸進的に変化してきた結果、実用に堪える安全で便利な用具として完成したというもので、単線的な一種の進化論的理解であった。本論文はそれに対し、自転車の特定の形式とそれに付随する性能が支配的であった時代を、他と区別される一つの時代のまとまりとして捉えた点に、その真価がある。そうすることで、自転車の発達を、技術史的な視点（性能）と社会史的な視点（用途・社会的意味）とを有機的に結びつけ、一体のものとして考察することを可能にしている。特に、技術上・デザイン上の変化が、このオーディナリ型自転車の時代には、必ずしも安全・快適・便利といったことを志向せず、むしろ危険と操作の困難とを増加させるかたちで進行したことを、多くの同時代の自転車デザインの実例を分析して実証したことは重要である。

同時に、オーディナリ型自転車が支配的であった時代にも、スピードを獲得するためのレーサー型と、道路の走行を目的とするロードスター型の車種の分化が生じ、またオーディナリ型と同じ遊戯的な目的のためにも、より安全で快適性の高い三輪自転車が補完的に存在していたことを明らかにして、同じ一つの時代の中にも多様な洗濯の可能性があったことを示している。三輪自転車は、セーフティ型自転車の時代に入って、児童用三輪車を除いて消滅した。自転車の大衆化は、セーフティ型を採用することによって実現したからである。そのために三輪自転車は、いわば「絶滅種」のようなものとして、従来の自転車の歴史の中では閑却されてきた。単線的、漸進的進化史観の弊はまさにここにあるといってよい。オーディナリ型自転車の時代には、セーフティ型による未来は予見されてもいなかったし、確定していたわけでもない。オーディナリ型と三輪自転車との併行的な存在と普及こそが、この時代のリアリティーであったのであり、本論文はそのことをよく実証している。

未来の潜在的可能性の多様さは、自動車の発展においても存在した。本論文で明らかにされたアメリカ人発明家ペニントンによる独自の技術開発は、その実体が懐疑にさらされているとはいえ、英国社会で一時的な投資ブームをひきおこした。この「事件」は、二輪自転車とならんで三輪自転車が実用化されていた英国の時代状況を前提としなければ説明できないことを、ペニントンの新型自転車の、技術的、デザイン的な特徴から論じたことも本論文のユニークな功績である。

これらの成果は、同時代の資料、出版物を可能なかぎりば広く渉猟することで、

初めて達成しうるものである。申請者は、雑誌・年鑑などの定期刊行物をはじめ、初心者用の技術解説、道路案内、道路地図、メーカーの販売カタログ、自転車旅行記など多数の資料にあたることでそれを実行している。それらの中には、資料のデジタル化とオンラインによる公開という近年の傾向によって初めて利用可能になったものも多く、好機にめぐまれたともいえる。とくにこのようにして集められた多数の図像は、自転車の形態的特徴の数量的な解析を可能にただけでなく、所説を可視的に理解させものとしてきわめて有効に活用されている。

社会史、技術史の統合的な方法を採用しようとしたことから来る欠陥はもちろんないわけではない。それぞれの分野における研究業績を受容し、援用するにあたってやや性急でありすぎる感はまぬがれない。個々の論証においても、厳密さに欠ける点がないとはいえない。また、前後の時代との比較も、きわめて手薄であるといわねばならない。しかし、それらの欠点を補ってあまりある多くの発見に満ちており、また自転車の歴史についての画期的な視座を提示したものとして高く評価することができる。

以上のことから、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成23年8月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降